

出演者の多数キャンセル 波乱のルツェルン音楽祭の開幕

今年のルツェルン音楽祭は難産だった。

まず7月5日にダニール・トリフォノフがスケジュール等調整上の理由から、8月16日のコンサートにキャンセルした。ルツェルン祝祭管弦楽団の首席指揮者リッカルド・シヤイーが

手術のためキャンセルとなり、11日のオープニング・コンサートはパーヴォ・ヤルヴィが、前述の16日はアンドレス・オロスコ・エストラーダに代わると、8月3日に発表された。ヤルヴィは父親のネーメもオープニングを飾ったことがあり、往年のヤルヴィ・ファンには感慨ぶかい2代目デビューだった。オロスコ・エストラーダは春のメソッド・コンサートで春のメソッド・コンサートでメソッド・コンサートでもシヤイーの代役を立派に務めた功績がある。続いて8月9日にはアルゲリッチの病欠も発表され、イゴール・レヴィットが代役をはたした。

前述のトリフォノフは今夏の「アーティスト・エトワール」として、ほかにも室内楽

とソロ・リサイタル、ダニエル・ハーディンク指揮マーラー・チェンバー・オーケストラとの共演が組まれており、その最後の23日は深く心に沁み入る体験となった。

シユーマン「マンフレッド」序曲」で始まったプログラムは副コンサートマスターが弦を切ってしまうほど熱くスタートし

た。その勢いを上手に蓄えながら、適所に適量だけ小出しにするハーディングは計算的であるが、その真髄はトリフォノフとの共演で発揮された。

脂っぽい髪の毛を散切りにして髭を生やしたトリフォノフは、心を壊したシユーマンが乗り移ったかのように、速い世界から



観客が総立ちで何度も舞台上に呼び戻されたユジャ・ワン。左は指揮のマケラ
© Manuela Jans / Lucerne Festival

音を紡ぎ始めた。それにしつかりと寄り添うためには精密な計算が必要なのだった。フレーズを歌うときだけ一瞬光が差し、情熱がきらめき、またすぐ自身の暗闇のなかに入っていく。拍子にまったく支配されず、リズムにも刻まれない長い詩的フレーズは彼の思いを覚悟に変え、音楽の

拍に動かない深い流れを見せる。カデンツァも美しくはかなく、止まりそうなまでにテンポを抑え、消え入りそうな弱さを見せる。主題が繰り返されるたびに、絶望的になり、人生の喜びが見え隠れすると微笑んで、また消えていく。こんな狂気と隣り合わせの純粋な演奏を聴けるのは、幸福以外のなにものでもない。

第2楽章は静かな平和と憧れを味わっているトリフォノフに、ハーディングは完全に一体となってオーケストラを彼に沿わせる。内省的な高揚感には誰に聴かせるでもなく、一人で浸っている、その姿が他人にこれだけの喜びを与える稀有な演奏だった。

後半のブラームス「交響曲第3番」もそのままのテイストで、われを忘れない落ち着きはらった音楽作りと重いドイツ・ロマ派の音を聴かせる。第3楽章の切ない旋律も情熱に任せて流さず、チェロの旋律を浮き立たせたり、すぐにデイムスエンドをかけたリ、フレーズごとにちよつと止めたリ、よい意味で小細工を効かせて、高貴なメランコリーを実現している。バランス感覚が抜群だから、ほんの少しクレッシェンドしたり、フレーズを膨らませたりするだけで胸を突くのだった。

そんな静かな深い感動が冷めやらない25日、クラウス・マケラ指揮オスロ・フィルハーモニー管弦楽団とユジャ・ワン（D）の共演を聴いたが、若いパワーとスピード感があふれる対照的な演奏会だった。チャイコフスキー「幻想序曲（テンペスト）」は首席指揮者との共同作業にまだまだ伸びしろを感じさせた。限界までスリットの入ったシルバーのロングドレスとトレッドマークの超ハイヒールでユジャ・ワンが登場すると、客席から感嘆が漏れる。ラヴェル

「左手のためのピアノ協奏曲」では超絶技巧を披露したが、ワンらしさは感じられなかった。しかし休憩後、緑のドレスに着替えて再登場したワンはラヴェル「ピアノ協奏曲」で本領発揮した。リズム感もパワーもこの曲にピッタリ合っており、バスク調のフレーズもわがものになっている。オーケストラの豊かな色彩も際立ち始めた。転じて第2楽章の気だるさと安定感聴衆に平安を与える。指揮者との息もピッタリと合

い、第3楽章では軽やかに転がる音が美しく、超高速で駆け抜けたとき、真の「デイヴェルテイメント」となった。聴衆は総立ちで2回のコールのあと、ワンは一人で拍手を受けたが、聴衆はそれでも飽き足らず、リズム打ちで拍手をするがステージに出でこない。楽団員たちは顔を見合わせ、客電は数段階暗くなるが拍手は止まない。やっとなアが開いても誰も出て来ず、ついにピアノを片付ける面々が登場するとブライニングが飛んだ。

ようやくスクリヤーピン「交響曲第4番《法悦の詩》」が始まると、大いなる挑戦を続け、楽団員も結集して壮大なスケール感を聴かせた。続く拍手にアンコールで応えたシベリウス《白鳥》はマケラのベストだった。

ルツェルン音楽祭後半については来月も引き続きレポートしたい。

クララ・ハスキル国際ピアノコンクール

第30回クララ・ハスキル国際ピアノコンクールがウヴェイで開催され、日本からは飯塚健之介と谷昂登がクォーター・ファイナルまで進んだが、次のセミファイナルには残れなかった。